

新理事長就任にあたって



日本免疫学会理事長

審良 静男

この度は、斉藤隆理事長の後任として2014年12月から2年間の任期で、日本免疫学会の次期理事長に任命していただき大変光栄に存じますとともに、責任の重さをひしひしと感じております。

現在、日本の免疫学は分岐点にさしかかっている気がします。これからの5年、10年が大切だと思います。これまで免疫学は、生化学、分子生物学や細胞生物学の手法を取り入れながら発展し、抗体の多様性のメカニズム、多くのサイトカインの機能、細胞内シグナル伝達経路や、最近では、各種T細胞サブセット、自然免疫の役割などをあきらかにしてきました。これらの研究に日本人の貢献は計り知れないものがあります。日本の免疫学研究は、国際的にも広く認知されているところで、これまで15回開催された国際免疫学会のうち、2回も日本で開催されております。トムソンサイエンスの論文引用統計でも、日本の免疫学が国際水準と比べて非常に高い位置にあることを証明しています。今、この優位性を持続していくにはどのようにすればいいのか考える時期に来ているように感じます。これまでの免疫学の研究成果は、免疫学的に優れているだけでなく、多くの他の生命科学分野にも大きな影響を持つものでした。つまり、免疫学が他の研究分野の牽引役をしていました。これからの免疫学もそうあるべきで、そうでないと日本の免疫学の優位性は持続できないのではないかと考えます。今日、免疫学研究においても中国や韓国の勢いはすごく、脅威となっています。日本の産業界の二の舞にならないように、日本の免疫学研究者は、これからも新たなテクニックを積極的に取り入れながら、オリジナリティの高い研究を発表していかないといけないと思います。いい研究をすれば、そこに人は集まります。わたしが30年以上前に、免疫学を志すようになったのも、免疫学の黎明期にあつて日本人の素晴らしい研究成果に魅了されたからです。

今後の免疫学は、これまでの還元的研究からシステムとしての免疫応答とヒト免疫学への本格的な研究へ進むのはあきらかです。免疫学は、この数十年で飛躍的に研究が進み、膨大な細胞や分子の個々の働きに関する知見が深まりましたが、それらがどのようなつながりを持ち、体全体のシステムとしてどのように機能しているのか、という研究はこれからです。このような研究を遂行するためには、従来までの、細胞を生体から取り出し破壊して細胞内の分子の様子を調べるという手法から、より生理的に生体分子や細胞の挙動を、空間的、時間的にとらえることができるイメージング技術はぜひ必要になります。今後のイメージング技術とシステムバイオロ

ジーの発展を期待いたします。このような他の生命科学にも共通するような課題以外に免疫学に特有の多くの問題(胸腺でのポジティブ・ネガティブセレクション、末梢でのトレランス、メモリーの分子基盤など)もまだ解明されていません。この大きな免疫学的問題が日本の免疫学者によって解明されることを期待いたします。

ヒト免疫学の発展は、今後の大きなテーマです。これまでもマウスでの実験結果がヒトには還元できず、マウスでは病気が治るがヒトでは効かないと批判されてきました。マウス免疫学研究者もヒト免疫学への還元を考えながら研究をしなくてはならない時期に来ています。

免疫学研究の重要性を、一般国民に知ってもらうことも大切です。いつも思うのは、日本では、免疫学が他の分野と比較して成果の割には、過小評価されているような気がします。免疫学が単にアレルギーや自己免疫疾患、ワクチンだけの研究でないことの認識を持ってもらう必要があります。サイトカインや自然免疫の研究によって、免疫は、単にリンパ球間だけで完結する現象でなく、すべての体の細胞が免疫応答に関わることがあきらかとなり、さらには、最近では、炎症も免疫研究の範疇に入ってきました。米国科学アカデミーでのimmunology分野が、数年前からimmunology and inflammationに変わったことは注目すべきです。広義の免疫学は、動脈硬化、代謝疾患や神経変性疾患などほとんどあらゆる疾患に何らかの形で関与します。病気の3分の2以上が免疫疾患であるとも言われています。そのため、免疫学的知識は、あらゆる臨床医や臨床医学の研究に必須のものとなってきました。そのため、臨床研究分野との交流や「免疫ふしぎ未来」や免疫学の一般向け書籍発行を通じての一般社会への啓蒙がこれまで以上に必要です。

最も重要なことは、国際的に活躍できる次世代免疫学者の育成であります。年次学術集会では、積極的に英語による発表を推進するとともに若手研究者の発表を優先し、さらに優秀な若手免疫学者を海外の学会などに派遣し、あらゆる機会を使って世界のトップ研究者と肩を並べ切磋琢磨できる環境を提供していく必要があると考えます。

最後に、これまでの日本の免疫学研究の素晴らしい伝統を受け継ぎ、今後も国際社会で日本の免疫学が重要な位置を占め続けるよう、微力ではございますが尽力する所存でありますので、本学会の活動・運営に関しまして会員の皆様の多大なるご協力とご支援をお願い申し上げます。